

## 古田「ヤマダイ」国論争から「ヤマタイ大嘘八百」論争まで

……邪馬台国論争は既に終わっている

会員 ID10363 掛布 広行

### 1. 邪馬台国論争の背景

日本中の多くの古代史愛好家が熱中している「邪馬台国論争」を江戸時代から延々と続けてきたが、いまだに決着がつかず、「邪馬台国」はご当地ソングのように全国津々浦々に存在する。

決着がつかない理由は簡単で、それは、「『三国志』は間違い」と決めつけたからで、『三国志』が間違いならどこを「邪馬台国」にしても否定できない。

なぜ『三国志』を間違いにするかと言えば、『三国志』どおりであれば奈良大和に、筑後山門に、須玖岡本に、その他に「邪馬台国」を誘致できないからだ。

そして、どの説も共通して間違いは行程で、方角、距離、日数のみ間違いとする一方、鏡、金印、絹をもらったこと、環濠集落、城柵、古墳があることは全員すべて正しい。

これも当然で、これも間違っていたら三角縁神獣鏡も漢式鏡も纏向遺跡も吉野ケ里遺跡も箸墓古墳も須玖岡本古墳も「邪馬台国」の証拠にできないからで、出土しなくても盗られた、そのうち出土すると言い逃れる。

遺跡も無関係になると、「山田太郎・次郎」ではないが、「ヤマダイ(ヤマイチ)」国から「ヤマタ八百万」・「ヤマタ大嘘八百」国まで存在することになり、「邪馬台国論争」は自説に都合のよい論理から成り立っている。

ある説は「不彌国の南は東の間違いで邪馬台国は省略された長里1300里先だ」、違う説は「不彌国の南は合っていて邪馬台国は省略された短里1300里先だ」と言いあうが、お互いに相いれるはずがない。

そのため、マスコミも「親魏倭王」の金印が出ない限り決着しないので永遠に決着しないと揶揄しているが、もちろん、出土しても「漢委奴國王」印とおなじように盗まれた、落とされたなどと言い張るだろう。

ここが「邪馬台国」、ここが「卑弥呼」の墓と銘板があっても、偽造だと言って自説を曲げない人がいるかもしれない。

### 2. 邪馬台国への行程の考察

壱岐の直径は16Km弱、対馬は長径70Km弱と短径15Km弱で、島全体で1国か複数の国かわらないが、朝鮮から対馬が最短で55Km強、接点経路で最短80Km強、対馬と壱岐は最短55Km弱、接点経路で最短60Km弱、壱岐から唐津が最短40Km、接点経路の最短45Km強ですべて千里と書かれている。

里単位を長里だいや短里で1里70mといろいろ述べられているが、私たちの目に映る現実では1里50m強とする以外、壱岐の直径が16Km弱という事実がある以上動かすことができない事実である。

すなわち、千里は50Kmくらいで、接点間の距離では最大千6百里と1.5倍になり百里にこたわった、「張政」を送り込んで行程をよく知っている『三国志』としては大雑把すぎるので、国境の最短距離と考えた方が合理的で、到着地から出発地の間は陸行でないと辻褄があわない。

仮に接点を通るすべて水行とすると、「奴国」からの残余1400里は70Km程度で「不彌国」を各説に有利なように想定して、福岡市から南方向で測ると大牟田市近辺で、筑後山門までの

千里程度をとおりこし、東方向とすると直線で大和に足りず、大和なら直線でも1万里となり、大牟田や北九州では鏡、絹、古墳、環濠集落が合わない。(図1)

さらに、仮に「奴国」からの残余1400里のみ長里にすると、東方向は大和辺りにできるが、水行の日数が「投馬国」まで二十日(330Km)とされているので水行十日(150Km)以上、または、陸行を含めると着船場所もわからないし、1月もかからず、「伊都国」から1400里は筑後山門も奈良大和も行程では証明できない。

そこで、水行十日を一月の間違いとさらに都合よく間違わせるのであり、「投馬国」の南1万2千里では沖縄になってしまい、水行十日では着きそうもなく、陸行で1月も歩くところが無く、国名も「琉球国」で「倭国」とは言えない。

「投馬国」を東行にすれば、「不彌国」から東でよく、「投馬国」を記述した必要性、なぜ西回りの水行にしたかが問われてしまう。

一層のこと、全部書き換えた方が早く、距離は千里で「山門国」の間違いだ、東1万2千里で「大和国」の間違いだとすれば良いのだが、これでは身も蓋もないからだれも論じないが、従来説は同じことを、言い方を変えて論じている。

しかも、『後漢書』『梁書』『隋書』もすべて「倭国」まで「樂浪郡徼去其國萬二千里」、「去帶方萬二千餘里」、「古云去樂浪郡境及帶方郡並一萬二千里在」と全て郡から「倭国」まで『三国志』と同じ「自郡至女王國萬二千餘里」と「郡」から「倭国」まで1万2千里なので『三国志』を認証している。

『旧唐書』で「多自矜大 不以實對 故中国疑焉」と疑いながらも、初めて「去京師一萬四千里」と「西安市」から「郡」の直線千5百 Km、「福岡」から「大和」まで直線5百 Kmとして2千里増やしたが、2千里と2千 Km では1万2千里と合わせて1万4千 Km になるが、西安から大和を通り越してシカゴまで行ってしまい、すなわち里単位が変わり、唐朝では「西安・大和」間の約3千5百 Km で一萬四千里だったことがわかる。

### 3. 古田説の考察

そこで、古田説が出現し、『三国志』は正しいと論じ「半周読法」と「奴国傍線行程」の理論を主張するのであるが、古田説も「邪馬台国」を「須玖岡本」にしたいだけの説であった。

「千餘戸」の「伊都国」と「二萬餘戸」の「奴国」を2百里10Km 四方で古田説なら150里四方しかない糸島平野に押し込んでしまう離れ業を持ち出し、「伊都国」と「奴国」の中心の距離が100里5Km、古田説なら7Km で2国の半分100里×200里に1万5百戸を、「伊都国」だけなら1Km 四方位に1千戸を押し込め、超過密都市とし、農地など確保できるはずもない。

そもそも、中心距離なら「伊都国」東南百里で「奴国」なら「伊都国」東百里も「奴国」で「不彌国」など有り得ないから、壱岐を3Km も浸食させて弥生時代の国と国の距離を少しでも広げようとしたのに過ぎず、3Km 浸食を証明しなければこの論理は使用できないし、中心間の距離なら島反周巡りの意味が無い。

朝鮮半島で補正したと述べているが、国境の距離が朝鮮半島横断の直線であったのか疑問で、距離は長くなればなるほど誤差が膨らみ、『後漢書』に「各在山海間 地合方四千餘里 東西以海為限」とあることから朝鮮半島方4千里が200から340Km で、最大10里イコール0.85Km、これに従うと壱岐の直径が25Km になってしまう。(参考韓地)

古代は距離が概数に過ぎないとたかをくくって自説に合うようにゴム紐で測るように操作することは科学的でなく、まずは現代の絶対値を基準に古代の距離を推定しなければ、議論がまとまるはずがない。

壱岐が浸食されて小さくなったかもしれないが、まずは現代の大きさを基準にすべきで、現代の基準で証明できないときに前提が間違いとして変更すればよい。

古田説は国境間の距離にすると「奴国」が糸島平野に収まらないための窮余の論理で、「伊都国」を現代のローマの中の法王の国のバチカン市国のようにしないと、「奴国」の2万戸を押し込められなかった。(参考古田説概念図)

「狗邪韓国」から「對海国」、「對海国」から「一大国」、「一大国」から「末廬国」とすべて水行で国境から国境と読めるのに、「奴国」と「伊都国」のみ辻褃合わせに国の中心間の距離にしてしまう節操のなさである。

ところが、同じように国境間で読み従うと、「伊都国」東南の「奴国」は日向峠をこえた福岡市西区・早良区・城南区あたりとなるが、千餘家の同じく福岡市西区北端の「不彌国」の南はやはり福岡市西区を含む「二萬餘戸」の「奴国」になってしまう。

「不彌国」を人口1千万のベルギーとすると人口6千万のフランス3.5国分と人口8千万のドイツの9国分がベルギーの南に接していると表現していることと同じで常識外れの論理になって、その疑義は『梁書』に現れた。

訪日していない「梁」は「倭国」を琉球の地にしてしまい、同時期に書かれた『隋書』では「裴清」が訪日しているため、「夷人不知里數但計以日」と「隋」の里単位と合わずに里程を知らないと決めつけたが、「倭」の里単位と「隋」の里単位が違う旧南朝の里単位を「倭」がまだ使っているという意味で、距離も「古云」と記述して「隋朝」の里単位と異なるとしめしている。

同時代に書かれた『梁書』に日本人の距離を述べた「其國有沙門慧深來至荊州 說云 扶桑在大漢國東二萬餘里」と記述があり、倭人が距離を知らないことを否定しているので、来日した「隋」が倭人の距離の話を知らないはずがない。

もちろん「梁」でも倭と里単位が違うようで、1万2千里を陸行1月水行10日では足りないため、はるか南方と考えているが、この疑義も「不彌国」の位置に疑いがあるため発生したことで、土地勘があれば『隋書』のように里単位を知らないと記述したと思われる。

そして、古田説の詳細な調査による、「奴国傍線行程」の理論は論理的で、「至」の類例が有り、否定する論証はかなり困難で、同時代の文献にこの類例は間違いと言及した文を探し出さない限り否定できない。

また、「奴国」の東に「不彌国」があっても、「不彌国」は小さすぎて、「奴国」の東または南に「邪馬台国」が存在し、「不彌国」を記述する意味がない。

「奴国」の東ではなく東南にして「不彌国」を南方の大宰府市に移動すると「邪馬台国」は小郡や朝倉だが、『日本書紀』に「皇后欲擊熊鷲而自橿日宮遷于松峽宮時飄風忽起御笠墮風故時人号其處曰御笠也」と記述され、「不彌国」にある御笠は戦いの最前線で、首都が戦いの中では訪中も来日もできない。

#### 4. 邪馬台国の考察

従って、「千餘家」の「不彌国」の南に「二萬餘戸」の「奴国」と「七萬餘戸」の「邪馬台国」、国境が東西9、南北1の長方形の地域を探さなければならない。

「不彌国」の南に国境間0里が「邪馬台国」なのだから、「不彌国」がわかれば「邪馬台国」もわかり、何としても探さなければならない。

「千餘家」の90倍の「九萬餘戸」、短径の1辺と長径の1辺が9から10倍なのだから東西に細長い地域でなければならないのだが、そんな場所が博多湾には存在し、能古島、志賀島、海の中道の地域である。

糸島半島東南端の博多湾で「伊都国」と5Km 空いた国境を持ち、南に博多湾をはさんで「奴国」があり、海の中道で糟屋郡や東区と接する地域で、国境間の距離0里、従って、「邪馬台国」は糟屋郡、東区、博多区と『三国志』は述べている。

実態として「不彌国」が博多湾岸も領地で、「奴国」をとおらないで「邪馬台国」に着いたか、博多湾岸が領地でなく「奴国」をとおって着いたか、船を使ったか『三国志』には「東行」と書くのみでわからないが、「不彌国」から南なのだから海の中道経由なのだろう。(図2)

「邪馬台国」が朝倉や小郡も可能性無しとは言えないが『日本書紀』の「日御笠」の文面から「南有狗奴国」と「狗奴国」の可能性が高いが、筑後川を挟んだ対立でも『日本書紀』と内容がかけ離れてはいない。(図3)

しかし、『三国志』の「東南至奴国百里」と動詞のない、行かない「奴国」と「東行至不彌国百里」の動詞のある、行く「不彌国」の違いと、同じ『三国志』内のそれぞれの類例が最大のネックとなる。

動詞を省略する場合は類例で、目的地「邪馬台国」に対して「南至邪馬壹」のように、「到着」の意味で「奴国」が目的地になってしまうし、「投馬国」は「南水行二十日到投馬」ではなく「南至投馬國水行二十日」とわざわざ別文にし、「黒齒国」は「船行一年可至」と書いて「黒齒国」に行っていない。

「不彌国」が大宰府では、大まかに「奴国」の東との記述になるが「奴国」の東南どちらかと言えば南に「不彌国」になって微妙であり、『三国志』は東と東南を区別しており、さらに、女王が戦場となる不安定な場所に都を持つことは考えられない。

また、「梁」が「不彌国」から「投馬国」さらに「邪馬台国」とはるか南方にして「邪馬台国」が朝倉・小郡を否定する理由がなく、「梁」が倭の里単位を信用した間違いで、『隋書』が「夷人不知里數」と「倭国の里程は里数を知らず間違い」と同時代史書が『梁書』の「倭国里程」を否定している数少ない類例だ。

唐時代、既に倭国の里単位が違うことが解っていても、対象の時代の目を通して史書を記述していることがよくわかり、『後漢書』も『三国志』の写し間違いでなく、「後漢」時代の目を見た「邪馬台国」と考えるべきで、後漢時代には邪馬台国と呼ばれ、魏・晋時代には邪馬壹国と呼ばれていた。

## 5. 地理的考察

実際に、唐津から東区まで60Km 千2百里で、海の中道経由の東区まででも60Km と同じで、島めぐりなどと言って半周しなくても、実際は国の領内歩行で「末廬国」内の歩行も含めると距離の残余など無く足りないくらいで、「奴国」の東、「不彌国」の南と絶対動かさない位置を示していた。

古田氏は百里7Km としたが、唐津から糸島まで25Km で5百里、35Km なら福岡市西区に着いてしまい、「末廬国」や「伊都国」の周旋や地形変化と強弁するのだろうか。(図4)

『三国志』の古代の一般の読者が普通に感じ取った方法、朝鮮半島南端から水行3千里、しかし船ばかりなら「投馬国」へ水行20日のように3等分する必要が無く、それぞれ陸行があると理解し、陸行は「或絶或連周旋可五千餘里」と歩いて海にぶつかり、船で陸地にぶつかり、曲がりくねって「五千餘里」の行程だと書いている。

行程がわるように、1国の大きさを「對海国」と「一大国」で200から300里四方位程度と想像させ、500里・100里と徐々に距離を短くして、最後は「奴国」と「不彌国」で「邪馬台国」の位置を2点で確定し、さらに先の東には倭種、南には「其南有狗奴」と敵対する国があつて、さらに南に船

でないといけない、間に敵国がある「投馬国」と、拡がりを描く手法である。

実際の朝鮮半島から松浦半島北端まで180Km 程度、そこから福岡市東区まで80Km 程度、対馬の比田勝・巖原港間70Km 強、壱岐の勝本漁港・印通寺港間15Km 強で合計の陸行165 Km 強、松浦半島中間の唐津港なら3対2の距離となる。(図5・6)

ちなみに、現代の釜山・比田勝航路と巖原・勝本航路は70Km 強、印通寺・唐津航路は40Km 強で合計180Km 程度の3千6百里、唐津・福岡市東区60Km で陸行145Km の2千9百里となる。

印通寺・唐津航路の40Km が少ないと思われるが、古代の航路は『三国志』に「從郡至倭、循海岸水行」と目印を見ながら沿岸航行を行ったと考え、朝鮮から壱岐までは目標に向かって一直線で、松浦半島は入り組んだ沿岸を航行すれば距離50Km に近づく。

すなわち、船行3千里、対馬4百里、壱岐3百里、末盧・伊都間5百里、伊都・不彌間百里で、千戸程度の1国の直径3～4百里で伊都国内不彌国内計7百里と考えれば約5千里だ。

唐津・福岡市東区60Km に末盧・伊都間5百里、伊都・不彌間百里を除いた何か加わり、末盧以降に30Km、末盧以前に40Km の道程が無ければ意味が通らないのが『三国志』の文章で古代中国の読者は領内歩行を補ったと考えられる。

朝鮮から対馬、対馬から壱岐が55Km で各々千里余、壱岐から唐津は40Km だが沿岸航行なら50Km 程度千里になり、最短距離で測定した参考図では対馬内50Km、壱岐内15Km、唐津福岡市東区間60Km で合計125Km 2千5百里、併せて5千5百里で壱岐方3百里を現在の壱岐の直径15Km とするとほぼ符合して百里5Km を見直す必要が無く証明されたと言ってよい。

## 6. 邪馬台国論争の終焉

長い年月の間決着がつかない「邪馬台国論争」だが、決着がつかないのは前提、すなわち、『三国志』は間違いという前提が間違っていて、『三国志』が正しければ結論は決まっていたのであり、しかも、この結論をすでに論証している文献が存在し、それが『日本書紀』である。

『日本書紀』は「神功皇后紀」の「皇后39年」と「景初三年」239年、「皇后40年」と「正始元年」240年、「皇后43年」と「正始四年」243年に対応させて記述し、「一云足仲彦天皇居筑紫檀日宮」と東区にある檀日宮に宮を置いた伝説があったと書き、「猪野皇大神宮」の近辺の山田邨で斎王となって、「八幡」信仰は神功皇后の武功から始まっている。

ここにも「山田猪」国があるが、落語のオチのような「山田イ・ロ・ハのイ」国でもあるまいし、いくら猪之国王と『後漢書』の「光武賜以印綬」の金印にあいそうでも、私は「邪馬台国論争」の原因の字面遊びを止めておく。

まさしく、従来は神官に祀らせた神を王自らが神主となって祀る、『魏志』に書く「鬼道」すなわち、王が神との仲介者となり王の言葉が神の言葉とし、「香椎宮」には仲哀天皇陵と言われる円墳が有り、同時代に円墳が有ったことがわかる。

「神功皇后紀」の前代「成務紀」には国境を「則隔山河而分國縣」と山河で分け、国境間の距離0里の川幅の証明もされ、「隨阡陌以定邑里因以東西爲日縱南北爲日横山陽曰影面山陰曰背面」と太陽光を使って測量しているが、この測量に中国からもらった高品質な鏡を使ったことは十分考えられる。

さらに、「即以皇后所杖矛」と矛が記述され『三国志』の「兵用矛楯」と対応し、博多周辺の遺跡の豊富さは今更言及する必要もなく、「7万余戸」の大都市を疑う余地がなく、そもそも、「7万余戸」の弥生時代の大都市はそれほど候補地があるわけがなく、遺跡状況からも畿内か福岡平野ぐらいしかない。

そして、遅くとも8世紀に、『三国志』を読んだ『日本書紀』の記述者は『旧唐書』で「其人入朝者多自矜大」と自国を巨大に述べ、短里を使用していたと考えられ、「不彌国の南は東でなく南で正しい、萬二千里の地は香椎宮にあたり、神功皇后の時代の話」と感じ、『三国志』の「邪馬台国」の首都を「香椎宮」と理解し、「邪馬台国」の首都は「香椎宮」だと証言していて、「邪馬台国論争」は既に終わっていたことが証明されていた。

この証言は、大和朝廷自らが認めた、邪馬台国が畿内になかったから仲哀天皇だけ穴門や香椎、御笠の松峽に宮を遷し、特に香椎は一説にして、「卑弥呼」は大和朝廷の人物でないことを証言した。

「卑弥呼」が大和朝廷の「倭媛」などなら隠す必要が無く堂々と「倭媛魏志云卑弥呼」と書けばよいのだ。

## 7.最後に

「邪馬台国畿内説」は「新井白石」の文字遊びから始まり、「本居宣長」の『古事記』偏重すなわち『古事記』と『三国志』は全く相いれない著作物(拙著『古代史家は古代史を偽造する』に詳述)であったため『三国志』の間違い説が完成した。

『日本書紀』や『三国志』を否定することで論争がはじまり、前提が間違っていたから結論が出ず、出発点が間違っていたのであり、地名の類似など日本中に存在し、まずは『古事記』と『日本書紀』の評価から出発すべきだった。

『三国志』が正しいとも間違いとも証明することは難しいが、少なくとも『三国志』に書いてあることは厳然と存在して証拠になるが、『三国志』が間違いという記述は同時代に存在せず、間違いという証拠がなく、『三国志』を間違いにすると比較優位は争えるが証明できず、『三国志』を過去に戻って書き換えることは不可能だ。

現に、「間違い説」は双方が証拠をもって論理の矛盾を言い合うことができず、間違いと『三国志』にも同時代史書にも書いてないのだから「間違いでない説」を崩す証拠は簡単ではなく、批判しても違う「間違い説」が批判を否定し、「間違い説」内で自己矛盾に陥る。

『三国志』が間違いなら、「三角縁神獣鏡」も「漢式鏡」ももらったのかどうかわからないし、後代史書に登場するから「卑弥呼」はわからないが、邪馬台国自体あったかどうかわからない、「邪馬台国論争」自体が虚構の国を探していたことになる。

『三国志』に間違いがあるとした瞬間、『三国志』の記述を流用する時に、流用する部分が本当に正しいか証明することが必要なのは当然の帰結で、『三国志』間違い説の人々は『三国志』が正しい証明も必要になる。

『三国志』の信頼性を落とした瞬間、『三国志』の内容を使うことができないことを自覚せずに、自分に都合の良いところだけ、おいしいところだけつまみ食いする態度は許されることでは無かった。

もし文書内に矛盾があっても間違いとするのではなく、矛盾した記述の原因を考えるべきで、多くは『梁書』の距離のように読者の誤解や「宣長」のように後代読者の誤謬からの派生に起因することを念頭に考慮すべきだ。

これで、「景初四年鏡」を「魏」からもらったなどという不可解な論調も改元をまだ知らない日本人の作成と解り、「三角縁神獣鏡」の呪縛がとけ、「三角縁神獣鏡」は「邪馬台国」以前から作られた可能性があり、「纏向遺跡」の再評価を行うことができる。

もう一度書こう。

「邪馬台国論争」は8世紀に既に終わっていた。

参考

『「邪馬台国」はなかった』 古田武彦 角川文庫

『古代学の最終兵器』 掛布広行 <https://hikakeno.blogspot.jp/>

『古代史家は古代史を偽造する』 掛布広行 Kindle ストア

『三国志』・『後漢書』・『梁書』・『隋書』・『旧唐書』 <https://zh.wikisource.org/wiki/>

『日本書紀』 慶長 15 年 国会図書館デジタルライブラリー <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/>



google map 加工



図 1 従来説





図2 邪馬台国への経路例（奴国傍線行程）



図2 邪馬台国推定領域（奴国傍線行程）

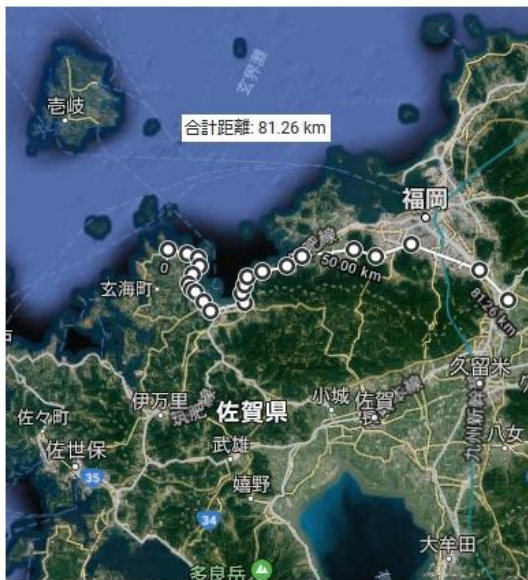


図3 邪馬台国への経路例（奴国→不彌国経路）



図3 邪馬台国推定領域（奴国→不彌国経路）

※筑後山門まで700里



図4 伊都国と末盧国・奴国・不彌国の位置と距離



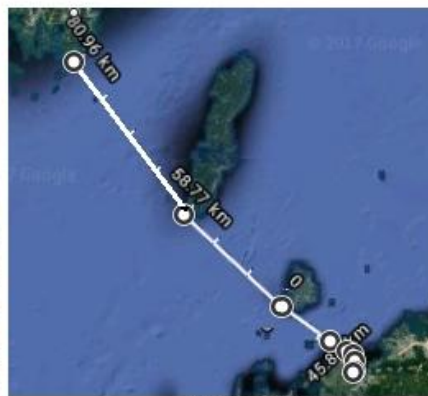
図5 壹岐・対馬陸行



地点間距離



図6 壹岐・対馬陸行せず



地点間距離





参考 津島・壹岐 陸行例



参考 韓地 方4千里 (最短と最長)



参考 古田説概念図